

廣瀬興郎 告別式 二〇一三年五月十日 今井館

祈 禱

天にいます私どもの父なる神様 あなたは宇宙万物の創造者にいまし、世界の歴史を支配されるとともに、私ども小さな人間のひとりひとりの生と死を宰ってい給うことを、畏れをもって信じ、心から感謝いたします。父なる神様 あなたは廣瀬興郎に命をお与えになり、七四年にわたる生涯を祝福し、ここにその深い聖旨によつて彼を御許にお召しになりました。

廣瀬興郎は、実業人としてよく働き、良き家庭を築き、良き友人たちに恵まれて、良き人生を生きることができました。晩年、重い病を得て苦しみましたが、いまや父なる神のふところに抱かれて、聖書の約束のように「もはや死はなく、もはや悲しみも嘆きも労苦もない」天の休息に入られたことを信じ、彼の靈魂をあなたの御手に委ねます。私どもは、ここに感謝をもって廣瀬興郎に告別し、安心して彼をあなたの許に送ります。

しかしながら、この地上に遺された者はなお朽ちるものをまとして、深い悲しみと寂しさの中にあります。慈愛と慰めの父なる神様、どうぞこの時に当り、廣瀬興郎に愛され彼を愛してここに集まっているすべての者、格別に須美子夫人をはじめ親族ご一同の上に、あなたの御慰めが豊かにありますように切に祈ります。

そして、天の父なる神様、どうぞこの時に当って「地に落ちた一粒の麦」なる廣瀬興郎の生涯に思いをひそめ、私どもひとりひとりも、それぞれの生涯の来べき終わりの日を思つて、厳肅に各自の生き方を顧みることができまますように、お導き下さい。

この告別式を通して、イエス・キリストの福音が宣べ伝えられ、出席者一同が神の祝福に与り、神の御名が

崇められる良き折として下さいますように、私どもの救い主イエス・キリストの御名を通してお祈り申し上げます。アーメン

## 式 辞

司会者として式辞を申しあげます。

式辞と申しましたが、何か改まったことをお話しするつもりも、また私にそのようなお話ができるわけでもございません。まずは私が承っている限りの「個人略歴」というようなことを申しあげながら、少しく私の思うところを申し述べたいと存じます。

廣瀬興郎さんは、この日曜日五日の朝ご逝去になりました。ご病床については後程ご家族からご報告があるうかと存じます。

廣瀬さんは一九三九年、兵庫県芦屋市でお生まれになり、東京・目黒（ちようどこの辺り）で成長されました。横浜国立大学工学部電気工学科に学ばれ、一九六二年に日立製作所に入社されました。ご長兄の影響で学徒時代からよく英語を勉強し、将来英語を使う仕事をしたいと思っていたという通りに、日立では海外事業部に勤務、二度にわたり通算八年余アメリカに駐在しておられます。日立退職後もご友人との共同経営で日立時代と同様火力発電用ガスタービンの輸出業務に長く携わってこられました。

一九六五年に須美子様とご結婚、二男一女をもうけられました。

廣瀬さんはまた尋常ならざる趣味の人でいらっしやいました。その趣味とはヨットです。お父様の影響で早くから船に興味を抱き、大学入学と同時にヨット部に入学してヨットに出会い、以降その人生は「ヨットづくし」（長男の言）となりました。折りしも東京オリンピックがあり、そのヨットレースに当っては学生ヨッ

ト連盟の委員長として尽力し、社会人となってからは、多くのヨット仲間（自分の財産と称していた）とクルーザーを操り、ヨットによる世界一周も夢見ておられたそうです。当然のことながら、海が大好きで、海に関する本屋やグッズを買いまくり、長兄のご遺骨を遺言に従って海に散骨したとも書いておられます。「人は趣味をもち、それを営々と育てていくことが大事だ」と常々言っておられたように、日本ヨット協会、世界セーリング連盟などの役員を勤め、あるいは江ノ島ヨットクラブを通してヨット普及活動をなさるとか、ヨットレースの国際ルール作りに関わるなど、ヨットの普及に大いに貢献されたのです。

実は、私は廣瀬さんにはご生前三回しかお会いしていません。それも亡くなる直前の一週間、もう会話もままならなくなられてからですから、私は廣瀬さんについて何程のことも存じあげませんし、わかっていないのです。その人間が失礼をも顧みずに敢えて少しく彼について申しあげることを、そのお積りでお聞き下されば幸いです。

私の廣瀬さんの第一印象は、ああこの方はこれまでの人生を精一杯生きてこられた、そういう人だなというものでした。世の言う企業戦士としては、アメリカだけでなく、伺えば世界中をとびまわり、特に新興国の発電所建設に協力し、その一方で留守を守るご夫人をして「海を愛する愛の力で家族を育て、養い、培ってくれた」、お子さん方には三人ともに「父を誇りに思う」と言わしめる頼りがいのある優しい家庭人としても、更にはヨットという格調高い趣味を生きるジェントルマンとしても、十二分に人生を生きてきた人物を、私はそこに見たのです。事実、彼はご家族に対して「思い残すことはない」と言っておられました。もちろん、その多彩な人生のかけには私どもにははかり知れない多くのご苦勞がございましたでしょうが、廣瀬さんは確かに、いつも誠実に、前向きに、力を尽くして、しっかりと、誇り高く生きてこられたのだと思います。そういう廣瀬さんに対して、私は深い敬意を覚えます。

三回の私の面会中に、私の心に残った廣瀬さんのお言葉が二つありました。二回目に伺った時ですが、彼は私に「あなたはなぜ私に会いに来てれるのか」と言われました。思いがけない問いに少々戸惑いつつも、私は「私は原田京子さんの友人で日頃お世話になり、親しくしていただいています。その原田さんのお兄様というので、お招きいただいて喜んでお会いしに参上しました」とお答えしました。ニコツとほほ笑まれ、互いに眼と眼を見交わしたとき、私どもは一気に親しい友人になってしまったのでした。

先程ご一緒に歌いました讚美歌三二二番は、多くのクリスチャンの愛唱する有名な讚美歌です。私どもが「主」であり「救い主」であると仰ぐイエス・キリストが、また私どもの「いつくしみ深き友」となって下さるということを感謝し、その喜びを歌ったものです。イエスという御方は、余りにも深く人間的であられた。その故にこそ「神の子」と仰がれる御方です。その御方が、私どもの小さな思いを超え、自ら進んで私どもの真の友となつて下さる。この慰めに満ちた事実を信じ、感謝するのがキリスト教の信仰であります。そしてこの信仰に立つとき、私どもはお互いどのような違いがあろうとも、その相違を超えて互いに「友」となるのであります。

もう一つのお言葉は、初めてお会いした折の「休ませて下さい」というものです。その時廣瀬さんは、この言葉を何度も何度も繰り返されました。身のおきどころのない、つらい、病臥の痛み、苦しみの中から「もう休みたい」と言われるのはごく自然、当然のことでしょうが、決してそれだけではない、その言葉は誰に向かつて言っているのかはかりかねるような、しかし誰かに対して訴えているような、何とも切実な叫びのように、私には聞こえました。実に深刻なことばでした。私なりに思索した挙句、一日置いてお会いした折、私は思い切って申しあげました。「廣瀬さん、どうぞお休み下さい。もう安心して、ゆっくりお休み下さい」と。

廣瀬さんがどう思われたか知る由もありませんが、また一日置いて三度目に（これが最後になったのですが）お目にかかった時は、素人目にはこれで暫くは持ち直して快方に向かわれるのではないかと思わせる程顔色

もよく眼をあけて、しっかりと話の受け答えもなさいました。たまたま四十年のヨット仲間という親しいご友人の北村隆様が来ておられ、ご持参のウクレレの弾き語りをして下さいました。驚いたことに、その二曲は私ですでに葬儀の式次第に選んでおいた讚美歌三二二番と四〇五番の讚美歌でした。家族会はいつも音楽会になると伺っていましたが、その時も病床にはコンサート会場となり、お孫さん方までご家族の皆さんそろって楽しく合唱したのでした。

再度申しますが、廣瀬さんは自分の意志で自分の人生を切り開き、自分の力で自分の人生をしっかりと生きておられました。しかし私の拝察するに、ガンが再発し余命の告知を受けた頃からは、きっと、いかにしてこの「死ぬ」という人生最後の大事な仕事を成し遂げるべきかを考え抜かれたのではないかと。それまでの仕事とは全く異なる、自力ではいかんともし難い、この人生最大の難事遂行の方途いかに、と。

そして遂に、その道はこれまでとは正反対の、自分の意志や自分の力に頼るのではなく、その自分を一切解き放って、心を開き、自分を低くして、自分の「外」の、自分でない「他」に自分を委ねる―その存在に「休ませて」いただく、そこに心静かに憩う、そこに新しい命、新しい自分を見出す以外に別に仔細はない、と思いでめられたのではないのでしょうか。

これは決して廣瀬さんが心弱ってこれまでの生き方を変えたというのではありません。反って、彼のようにしっかりと生きてこられたからこそ為し得た勇断であると、私は信じます。死の床に横たわるこの廣瀬さんのお姿に、私の彼に対する敬意は一層深いものになりました。

このように私が思いめぐらす時に、忘れることのできない大切な報告は、廣瀬さんがすぐ上の兄上で、七人兄弟中一番の仲良しだったと言われる原田京子さんの兄上に対する深い愛と切なる祈りであります。廣瀬さんは私に「なぜ会いに来てくれるのか」と尋ねて下さいましたが、私はただ彼女の熱い祈りに導かれて参上したのでした。

申すまでもありませんが、私が先に「他」と申しましたのは、私の信仰ではイエス、「いつくしみ深き友なる」イエスであります。そのイエスは言われました。「私の言葉を聞いて、わたしをお遣わしになった方（イエスが「父」と呼ばれた神）を信じるものは永遠の命を得、また裁かれることなく、死から命へと移っている」と（ヨハネ五・24）。そして、この福音（喜びのおとずれ）に生きたひとは叫びました。「死は勝利にのみ込まれた」（二コリ一五・55）と。その日、讚美歌四〇五番を歌い終えてから、私は英語がお好きでよくお出来になる廣瀬さんに申しあげました。「God be with you till we meet again.」「また会う日まで、神とともにいませ！」こうして、私どもはひとまずお別れしたのでした。

Until we meet again, God be with you. 皆様にも、この力強い「挨拶を申しあげて式辞といたします。

## 祈 禱

希望の源である神が、信仰によって与えられるあらゆる喜びと平和とで私どもを満たし、聖霊の力によって希望に満ちあふれさせてくださいますように。（ローマ一五・13）

主イエス・キリストの恵み、神の愛、聖霊の交わりが、私ども一同と共にありますように。（二コリント一三・13）